

〔第15回 学術集会シンポジウム〕

日本家族看護学会に参加して

清田真由美

春日クリニック 院長

昨年、更年期と加齢のヘルスケア研究会でシンポジストとして“内科医から見た更年期医療”についてお話をさせていただいたことがきっかけで今回、日本家族看護学会に参加することができました。看護師の皆様が、早い時期から家族や地域に目をむけ、日本家族看護学会として長年研鑽を積んでいらっしゃることを知り、改めて看護師という仕事のすばらしさを感じております。そして、家族や地域を支える中心として活動されている皆様と、しっかりと連携を取りながら私たちかかりつけ医も頑張らなければならないと刺激を受けました。

昨今、家庭の力、地域の力はますます弱まってきております。少子高齢化が急速に進む中、多くの家族が核家族化して、独居老人、老老介護が増え、認知症も大きな問題となってきました。介護を社会全体で担う目的で始まった介護保険制度も、早くも経済的に崩壊しつつあり、世界でも最速で迎えている日本の超高齢化社会に対して、医療介護の領域は待たなしの対応を迫られています。

人は、いずれはみな老いて介護を受ける身となります。この世に生を受け、子どもから思春期、妊娠出産の時期、子育ての時期、介護を担う時期、最後は自ら介護を受ける時期を、別々に切り離さないで一つに考えるとき、必ずそこには“家族”という言葉が浮かび上がってきます。

昔は、大家族制度のもと、現在のような恵まれた介護保険制度は無くても、当然のごとく家族がみん

なでそれを支えてきました。大家族、近所付き合いの中で子育ても行われ、自然の中で介護も看取りも行われてきました。

今、社会は大きく変わり、女性も社会進出し、家族だけで一生を支えていくことが大変困難になりました。新しい生活スタイル、様々な社会支援制度を駆使して、病める人のみならず、その家族を支えることは、地域を担うかかりつけ医の大切な仕事と考え、16年間仕事をしてまいりました。そのすべての面に接点を持つのが更年期女性である気がつき、本人の更年期障害の治療のみならず、直面している介護問題の相談、さらにはいずれ介護を受ける自分の身にも思いをはせ、準備を始めるよう情報発信を始めたのが10年前からです。会の名前を“おりひめの会”と名づけました。

そのような活動は、医師のみでは、到底カバーできません。看護師、栄養士、薬剤師、社会福祉士、介護福祉士など、多職種のチームを組んで、きめ細やかな情報交換をしながら、みんなで同じ視点を持って患者・家族の支援をしています。その中でも、患者さんに最も近い位置にいる看護師の果たす役割は大変大きいものです。

本学会は今後ますます発展され、家族力、地域力を引き出して、社会を支える力になっていただけないかと確信をしております。またそのような力が今こそ求められていると思います。日本家族看護学会のますますのご発展をお祈りいたします。